「彼は罪人の一人に数えられた」

マルコによる福音書１５章１６－３２節

森島　牧人　牧師

教会の暦で今日は、棕櫚の葉を振りそれを道に敷いて、民衆が最後にエルサレムに入城される主イエスを熱狂的に迎え入れた日、すなわち「棕櫚の主日」と呼ばれる日です。そして、この日から主イエスが苦しみを受けられることとなる受難週が始まります。

今日の説教題である「彼は罪人の一人に数えられた」は、口語訳聖書ではマルコ福音書の１５章２８節に［　］に入れて記載されています。しかし私たちの使っているカトリックとプロテスタントが一つとなった新共同訳聖書ではマルコ福音書１５：２８という節は存在せず、マルコ福音書の末尾に、異本による訳文として「こうして、『その人は犯罪人の一人に数えられた』という聖書の言葉が実現した。」と記されています。さらにこの「その人は罪人の一人に・・・」は先ほど交読しました旧約聖書イザヤ書５３：１２に「彼が自らをなげうち、死んで　罪人のひとりに数えられたからだ。」として既に記されています。つまり、初期のある教会で、旧約聖書全体の最も重要な結論といえるイザヤ書５３章を、短い言葉にしてマルコ福音書の中に加え、言い表したということになります。

皆さんもよくご存じの通り聖書は神を求める多く人々が関わってのものです。新約聖書では主イエスと出会った人々が主の語られた言葉を口を通して教え授けて行ったもので、新・旧約ともにそれが徐々に文章化され、さらに多くの人に書き写されることとなって広く伝わることとなりました。ですから原本がどんなものか分かりませんし、口伝の中で内容が違って来たり、写本の中で誤字脱字などが出て来ることなどは十分に考えられることです。聖書研究者たちの間で「彼は罪人の・・・」の部分がマルコ１５：２８にあることを疑問視する考えがあり、［　］の中に入れられたり、書の末尾に記されたりしているのですが、問題となっているこの言葉の意味や内容には非常に重要なものがあるのです。

ルカ福音書２２：３７に、捕らえられる直前の主イエスが「言っておくが。『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。」と弟子たちに言われる場面があります。ここで考えられることは、福音書の中では最も古いとされるマルコ福音書に拠って来た教会が、主イエスの十字架の出来事を伝える中でイザヤ書５３の預言を思い出し、後発のルカ福音書の中にそれが入っていることを知って、この説明、解説としての一節をここに新しく書き加えたのではないかということです。ルカではこのイザヤの預言の成就の言葉が主イエスの捕縛前のものとなっていることから、マルコでは主イエスが十字架に架けられた後に再度言われたものとして２８節に書き入れ、それを教会が理解し受け入れたということではないかと推察出来るのですが、そうであったとしても、間違ったことではないと思われるのです。なぜなら、この言葉がここにあることによって、今聖書を読む私たちがイザヤの預言を生き生きとしたものとして受け止め、主イエスの十字架の出来事の真の意味を理解することが出来るからです。

従ってこの言葉が何時からマルコ福音書にあったのかなどは問題ではありません。遠い昔のある時、とある教会がこの言葉を聖書に書き入れ、その後多くの教会がそれを伝えて来た、そして同じ立場の私たちもまた、遠い昔の人々と同じ解釈で主イエスの十字架の出来事を読む、それこそが正しいことと思われるのです。つまり、主イエスがこの世で行われた御業の意味が何であったかを、マルコ福音書のこの言葉はこの後も非常に明瞭に伝えて行くに違いないと思われるからです。

世の中の多くの人は、主イエスを歴史上の偉い人という程度の認識で捉えていると思われますが、主イエスが何のためにこの世に来られたか、何を目標として地上の生涯を歩まれたかを知る人、考える人は多くはいないように思われます。主イエスについて研究し、検討している聖書学者たちに於いても、この問いの答えを捉えているとは思えないのです。

聖書が私たちに証ししていることを一つの言葉にするとするならば、それはイザヤ書５３章の言葉です。マルコはそれを利用して１５章２８節に入れたのではないかと思われます。つまり主イエスが人間としてこの世に来られた唯一の目的は、＜罪人の一人に数えられるため＞であったということ、これに尽きるのです。主の受難を思いつつ聖書を読む時、必ずマルコ１５：２８を併せて読んでいただきたいと願うものです。

（説教要約　羽入田悦子）